



塩田庄兵衛著

『土佐のうちそと——同時代史抄——』

『土佐のうちそと』は、3部構成である。「第1部 土佐に生まれて」では、庄兵衛誕生と命名のいきさつから塩田家の墓地の紹介を含む自分史と土佐の歴史が、重ね合わせて展開される。坂本龍馬、中江兆民、幸徳秋水が同郷の先達である。とくに敗戦後の幸徳秋水との運命的な出会いは、自分史の画期的事件であり、1946年1月の幸徳秋水墓前祭への参加などから、『幸徳秋水の日記と書簡』（未来社）の編集、『幸徳秋水』（新日本出版社）の公刊その他、「秋水研究が私のライフワークのような形になった」（55ページ）。1983年1月除幕の幸徳秋水記念碑には、著者による秋水の略歴が刻まれた。『共産党宣言』の翻訳者としての秋水と著者との関係も想起される。

「第2部 人生の水先案内にみちびかれて」では、矢内原忠雄、大河内一男、沼田稲次郎、石母田正、難波英夫、田中正造、河上肇、丸岡秀子、山本安英、木下順二の諸氏との多彩な交流が、みずみずしくえがかれている。水先案内たちへの敬愛の情と適切な歴史的位置づけは、まさに情理兼ねそなえた珠玉の名文である。

「第3部 戦中・戦後を生きて」では、次の4項目と著者との同時代史的関係が明らかにされる。①大河内演習、②学徒出陣、③『共産党宣言』の戦後の初訳、④日米安保条約。そして最後に「民衆は戦争にどう反対してきたか」の歴史的総括と日米軍事同盟・新ガイドラインに対決する著者の反戦平和の訴えによって、全巻がしめくられる。見事な起承転結である。

著者は、かつて「これまでの60数年の人生でいちばん面白かったのは60年安保闘争であった。死ぬまでにもういっぺんあれを経験したい」（161ページ）と「口走って」いたが、今も「本音」であろう。旧

著『実録・60年安保闘争』（新日本出版社、1986年）のなかで、著者自身の奮闘ぶりが明示されているが、「壮志未已」（壮志いまだやまず）、新ガイドラインが時代の焦点となっている現在、著者とともに「60年安保闘争」を上まわる闘争に備えたい。平知盛は、「見るべき程の事は見つ」と壇の浦で入水し自害したが、世界史的大転換期に生きるわれわれにとって、宇宙の変化と人類の前途について、見るべき程の事はまだまだこれからである。

著者は、国外でも多面的な活動をつづけてきた。英国留学、世界科連での活躍、北京シンポジウムへの参加、ごく最近の訪中その他数え切れない。大河内演習以来の反戦平和の旧友として、『土佐のうちそと』の次の『日本のうちそと』の公刊による21世紀の国際的道しるべを期待してやまない。

（新日本出版社・1998年10月刊・2200円）

（儀我社一郎・理事・大阪市立大学名誉教授）

藤井治枝、渡辺峻編著

『日本企業の働く女性たち』

働く女性をとりまく環境は、この数十年間に大きな変化をとげている。高度経済成長期から低成長期、円高不況期、バブル期、バブル崩壊後の長期不況と、日本経済の推移とともに、産業構造がかわり、ME・OA化の技術革新がすすんだ。90年代に入ると、能力主義的人事・労務管理政策のもとで、雇用形態の多様化・流動化が一段と進み、労働者の一層の効率の活用は、女性労働を質的に変化させている。

本書では、このような背景をふまえ、都市銀行、信用金庫、証券、生命保険、総合商社、百貨店、電気機器、航空会社、新聞社をとりあげている。執筆者は、その産業・企業の人事・労務管理や女性労働者の状態に精通している研究者や労働者である。産業構造の変化、企業の人事・労務管理政策とくに新人事制度における賃金、昇進・昇格、評価システム、能力開発、研修などの制度と、女性労働者の状態に焦点をあてている。

産業の構造的変化にともなう、業務内容の変化がもたらす女性労働者の状態の変化に重ねあわせて、その中で働き続けてきた執筆者の人生、生き甲斐、